

追悼のことば

本日1月17日で、震災から23年です。実感がわきません。昨日のようです。夢であってほしいです。1月17日が近づくと、憂鬱な日々が続きます。

ドーンと大音響とともに、下からの大きな突き上げ、横揺れが激しく、立ち上がろうとしても立ち上がることができませんでした。一瞬、何がおこったのか分かりませんでした。

タンスの上から物などが落ちてきましたが、怪我はなく、2階で寝ていた私と妻、三男の秀英（スヨン）は無事でした。

揺れがおさまると、物音が何ひとつ聞こえず、真っ暗で一寸先も見えず、不気味でした。1階で寝ている二男の秀光（スグアン）が心配で名前を呼び続けましたが、返事はありません。早く1階に降りようと、暗闇の中、手探り状態で踊り場まで行き、降りようとしたのですが、階段がありません。不思議でした。

何も見えないので、1階が潰れているのが分かりませんでした。懐中電灯を探し、1階に降りようとベランダに出て、びっくりしました。家が潰れて道を塞ぎ、瓦礫の山になっていました。二男を早く助けだそうと焦りましたが、三男と2人では何もできず、ただおろおろしていました。兄弟、友達がかけつけてくれ、道具を持ちより、瓦礫をひとつひとつ取り除き、数時間後にやっと二男の傍に行けました。

顔の左半分はうっ血し暗紫色で、右半分は、傷はあったがきれいな顔で、眠っているようでした。その顔を、いまだに鮮明に覚えています。

顔を見た瞬間、涙が次から次へとこぼれ落ち、こらえようとしてもこらえきれず、とめどなく流れ落ちました。こんなに涙が出るものかと思い、男泣きに泣き続けました。妻は半狂乱で二男の名を呼び、安否を気にしてこちらに来ようとするのを、大丈夫だから来るなと止めました。

一縷の望みをかけ、弟に、担架の代わりに畳に寝かせて病院に運ぶよう頼みました。

妻がやっと落ち着いたので、急いで病院へかけつけました。病院に行く途中、新長田周辺のあちらこちらで火が出ているのが見えました。二男は遺体安置所に寝かされていました。

二男を亡くし、家を焼かれ、全財産を失い、ゼロからの出発ではなくマイナスからの出発は悲しくつらいものでした。

私には、悔やんでも悔やみきれないひと言があります。そのひと言で、大事な息子を亡くすことになりました。

成人式に参加するために東京から帰って来ていた息子は、16日に大学に帰る予定でした。帰って来るときから風邪気味でぜんそく持ちの息子は、しんどそうでした。妻は息子に「16日に大学に帰らないとだめよ」と言いましたが、私が「つらかったら17日に帰ったら」とひといい、息子も私の言葉に従いました。16日は1日中寝ていた息子に、夜10時頃「アボジ（父）風呂に行こう」と誘われました。今まで一度もなかったことです。運命を感じます。

銭湯で背中を流し合い、大学生生活のこと、卒業後は先生になりたいということなど、話はつきませんでした。その数時間後に家の下敷きになって亡くなるとは、誰が思ったのでしょうか。一番悔しい思いをしているのは息子でしょう。責任を感じます。悔やんでも悔やんでも、悔やみきれません。悲しみをのり越え、明るく安心して住みよい町づくりをめざし頑張ることが私のつとめであり、息子のためでもあります。

焼野原になった我が町を見つめた時、家はまばらで、夜は真っ暗で、夜道を歩くのは怖いくらいでした。明かりを取り戻し、安心できて住み良い町づくりのため、自治会を再結成し、会長になりました。

最初に明かりを取り戻し、夜でも歩ける町を取り戻した住民たちは、ほっとするなど言ってくれました。また、住民達とのコミュニケーションを強め、出会いとふれあい、親睦と交流を深めるバーベキュー、焼肉まつり、餅つき大会、防災訓練などを行いました。このような活動によって、知らない人同士が知り合いになり、つながり、絆ができ、点が線になり、線が大きな輪になることで、いざというときに大きな力になるでしょう。

私は今、語り部に参加しています。語り部活動のきっかけは出会いです。私と妻が震災特番に出ていたのを見た、小学校の同級生だった田村さんが、突然花束を持って訪ねて来ました。びっくりしましたが、嬉しかったです。毎年、1月17日頃に線香をあげに来てくれます。

ある時、震災の話を小学校で話してくれないかと依頼を受け、田村さんが語り部をやっていることを初めて知りました。

語り部では多くの出会いがありました。

「生の声を直接聞き、生々しさがよく伝わった。大変だったんですね。」

「死んだのは崔さんのせいじゃないよ！頑張ってください。」

はげましやあたたかい言葉をいただき、多くの勇気をもらいました。

命の大切さを語るだけでなく、震災体験者として、自治会活動の大切さ、重要性を忘れず、生活に密着した活動に真剣に取り組んでいます。語る事が私の活動の原動力になっています。

震災を体験し、三つの言葉を大切にしています。それは「命、愛、絆」です。

命。命は自分で守る、命あってこそ何でもできる。死んだら何もできません。

愛。人を愛し、人の立場に立って物事を考え、助け合うことが大切です。

絆。人と人とのつながりは大事です。自分ひとりでは何もできません。皆と協力しあうことが大切です。

この三つの言葉が、私の活動の原点です。三つの言葉を大事に、息子の分まで頑張ることが私に与えられた使命です。

「アボジ（父）頑張っているな」と、息子のひと言を聞きたいです。

2018年1月17日

崔 敏夫